言語學

801.
Ka373g

言語學

完

言語學

国語研究室
保管

九巻ノ一—拾巻九。
(三十六年一月—三十七年九月)

1:9, 2:70, 3:71, 8:72,
9, 10 元未完
1, 2, 4, 7,

801
Ka373

国立国会
29. 7. 22
図書館

337637

言語學

文學博士　金澤庄三郎

第壹章　文字論

其一　言語と文字

附錄

動植物間に判然たる區別を立て難きが如く、人類と他の動物との境界も亦結極に於て甚だ不明なり、然れども言語を有すると否とは確かに兩者を差別するに足るべき著しき特質にして、鳥獸の聲にも亦喜怒の情を寫するものあるべしといへども、人類の如く其思想を聲音によりて發表し得べきものあるを見ず、先づ思想ありて言語は單にこれを外部に發表するものなるか、若しくは言語其物によりて思想は形造らるゝか、此等の緊要なる問題は暫く論せずとするも、言語が人類に欠くべからざる資格なることは疑なき事實なり。

かくの如く、言語は人類の爲めに最も貴重にして暫くも離すべからざるものなりといへども、一方より見ればまた免るべからざる短所あり、何となれば、言語は口を衝いて出づる瞬時になりてまた忽ちに消滅す、故に其時間空間上に於ける存在は極めて憐なり、時間の上よりいはゝ、語るもの聞くものゝ生涯を以て最大限とせざるべからず、空間の上より見れば、また一層微弱なるものにして、如何なる高聲もよ

く數町の外に達し得ざるにあらずや、獨逸の人オスカルの實驗によれば、人聲の到達する最長距離は、一キロメートルの四分の一にして、母音各個につきていはゝ、アとオとは約三百六十歩、エは三百三十歩、イは三百歩、ウは二百八十歩を極度とし、其以外に於ては分辨し得ずといふ。

利害長短の相伴ふは自然の數にして、言語のみ獨りこれを免るべきにもあらず、然れども其害あるを除き短かきを補ふことは吾人の常に工夫するところにして、言語の場合に於ても亦よく其目的を達し得たり、即ち文字の發明は言語の欠點を補塡し、千里の外百歳の下に傳へて、些の遺憾なからしめ、印刷術の進歩は更に文字の効力を增進して、近世文化の基礎を造るに至れり。

其二　文字の起源

かくの如く文字の發明は不朽の盛事にして、發明中の發明と稱すべきものなりといへども、其時代の古きが爲め、往々其起源を忘れてこれを神の賜となすに至れり。即ち印度に於てはデヴナガリ（神都の文字）といひ、埃及に於てはヒエログリフ（神聖なる彫刻）といふ、我假字の語源を或は神名に假するが如きも、皆同一の傾向に出でたり、支那は流石に文字の國なれば、これに關する研究は古くより發達したるも、歐羅巴に於ては、他の學術の進歩に似ず、此種の研究は頗る遲々たりしが、十九世に至つて、埃及印度を初とし、アッシリア、バビロニア、メキシコ等の文字蒐集せられ、文字の

起源其發達等は漸く學者の注意するところとなり、文字の歴史によりて人類文化の淵源を究めんとする學者出でゝ、文字史は遂に一箇獨立の研究となるに至れり。彼等の中、もとより説の同じからざるものもあれど、今其最も一般に行はるゝものによりて概略を述ぶれば、文字の起源は單純なる繪畫にして、今日世界に於て最も完全なりと稱せらるゝアルファベット躰の文字も亦其根元に溯れば等しく繪畫なり。即ちアルファベットを歐洲に輸入せし、フィニシア人は埃及の繪畫文字を基としてアルファベットを發明し、希臘人はこれをフィニシアより得、羅馬人はこれを希臘人に學べり、而して希臘教を奉ずる國々、例へば露西亞の如きは希臘文字を執り、羅馬教の行るゝ處、例へば英佛諸國の如きは羅馬字を用ふるに至れるなりと然らば繪畫より進歩してアルファベットに至る順序、及ひ歐洲以外の諸國に於ける文字の狀況は如何。

其三　文字の種類

繪畫よりアルファベットに至るまでに、文字は諸種の變遷をなせり、繪畫文字とは今日メキシコ土人、亞米利加印度人、及び其他の半開蠻民の間に行はるゝものにして、文字中最不完全なるものなり、文字として用ひられたる繪畫は全く美的性分を欠き、たゞ某の事柄を粗雜に畫きたるものなれば、もとより言語の聲音とは何等の關係もなく、且其事柄全躰を一の繪畫にて示せるのみにして、其各部分を別個に表はさず、故に吾人の思想が極めて單純なる間ならば兎もあれ、少しく複雜したるものは

充分に描寫し難く、しかのならず直接に思想其物を寫して、思想を代表せる言語の聲音を表はゞさるとは、既に文字の第一義に於て其資格を欠けり、然れども、繪畫は何人も一目して其大意を得るに苦まざるを以て、また頗る便利なる點あり、I II III VX!?等は現に今日行はるゝ一種の繪畫文字にして、如何に言語を異にせる國民といへども、一見直ちに其意を知り得るが故に、これを世界共通の文字と稱するも不可なきなり。

繪畫文字稍進みては、既に思想の全部を一の繪畫中に收めず、其各部分を分離してこれを別箇に表はし、且つ其畫躰をも頗る省略して、眞の符號に過ぎざらしむ、かくしてなれるものを象形文字といふ、例へば兩足の形を畫きて進行の意を示めすが如き其一にして、埃及のヒエログリフ、及び支那文字の多數はこれに屬す、象形文字は繪畫文字に比して進歩せる點あれども、思想其物を寫すのみにして聲音を表はさゝることは二者同一なり、文字がこの寫想躰より寫音躰に進むことは、文字史上最も注目すべき現象にして其主たる原因は言語の中に同音異義の語多きにあり、今若し事々物々に別箇の象形文字を定め行かば文字の數無限に增加して、其煩殆んど堪へ難かるべし、此に於て同音異義の語を利用して、始めて寫音躰の文字を工夫するに至れり即ち此にx音にa b c d四種の意義ありとすれば、象形文字時代には、此四個に各特別の文字を定めたりしが、a b c dの四者皆同一x音なるによ

り、四種の象形文字中の一、例へばaは此通有性を代表するに至り、こゝに始めて意義を離れて聲音のみを表はす文字を出せり、今漢字の實例を擧げて更にこれを說明せば例へば、加といへる一音に數多の意義あれども、一々これ等に別箇の象形文字を造らずして、其中の一なる加をとりてこれを代表せしむ、但し支那語は世界に於て最も同音異義の語多き言語なれば、一箇の文字に幾多の意義を負擔せしむるは、混亂の甚なるを以て、便宜上半は象形文字を加へて、架、茄、珈、袈、痂、跏、駕等の複合文字を造れり、然れとも此等の文字中に見ゆる、加字は既に『加ふ』の意義ある象形文字にあらずして、加音を表はせる寫音文字なり。

かくの如くにしてなれる文字は、寫音文字なりといへども、いまた頗る不完全の者にして、支那語の如く聲音の組織簡單にして一綴以上の言語なく、加ふるに同音異義の語に富める國語なればそこ其用に堪ふべけれ共、假に之を我邦の言語に適用せば、忽ちに甚しき不便を感すべし、即ち同音異義の語彼が如く多からず、聲音の組織も亦複雜にして、一語多くは數綴より成り立てる我國語に於て、若し此の如き文字を採用せば其字數は彼れに數百倍すべし、これ言ふべくして行ふべからざることなり、此に於て此種の寫音文字、(假りに一字一語躰といふ)より、更らに工風を運らして一字一綴躰を文字を造るに至る、即ち從來一語全躰の音を表はせし文字を轉用して一語中の一綴を寫さしむ、例へば漢字安と米との二字によりて國語天を表

はすが如し、此場合に一字一語躰の漢字安と米とは國語に轉用せられて、一字一綴躰となれるなり、我國の假名文字の外、印度の梵字、朝鮮の諺文、其他滿州蒙古の文字等は皆此種に屬す。

然れども一字一綴躰は、なほこれ完全なる寫音文字に非ず、我國の如き、聲音の組織比較的單簡にして、もとは五十音圖にあらゆる綴字を含めたるも、今日に於ては既に不足を感して、國字改良の聲喧し、況んや其の他の聲音複雜したる國語に此種の文字を適用せば、徒らに文字の數を夥多ならしめ、實用上の不利甚しかるへし、現に朝鮮に於ては、別簡の綴字をなせる文字の數殆んど千に近し、然るに、古代の埃及に於ては文字の發達頗る急速にして、繪畫より象形に進み、更に一轉して寫音躰となり、進化の極遂に一字一音躰の文字をなすに至れり、これ實に埃及文化の致す所なりといへども、其國語の性質も亦關つて力あり、即ち埃及の語法、言語の變化を示めすに、各種の單音を語尾に附加するにより、漸次一音に關する觀念を養成し一文字に一音を與ふるの基礎を造れりかくて初、家屋の象形字たりし□は、Per（家屋の義）といふ一綴音を表はす寫音字となり、遂に其頭文字pの一音を示めすアルファベット躰となりぬ、羅馬字Pは即ち其變形せるものなりといふ。

これを要するに結繩の法の如きも亦文字の用をなせども、今日使用せらるゝ文字の起源は飯着する所繪畫なり、而して其發達の順序は、繪畫より象形を經て寫音に

至り、寫音の中に又一字一語、一字一綴、一字一音の三種あり、凡そ世界に文字の種類多しといへども、（ファウルマンの蒐集せしもののみにて二百六十六種あり）此三類五種に漏れずとは、泰西の學者が普く稱道する所なり、此說大躰に於て正鵠を得たれども予に一の加ふべき箇條あり、左にこれを述へて文字の分類法を修正せんとす、新たに加ふべしといふは、即ち科學的構造を有する朝鮮の文字諺文これなり。

第四　朝鮮の國字諺文（ヒロ）

諺文（カナモジ）に關しては或はこれを吏道（リト）と混じ、又は其起源を蒙古字にありとするなど、誤解の說多くして、其眞相いまた世に知られず、今少しく之を辨ぜんとす、吏道と諺文とは全く別物にして、吏道とは新羅の朝に漢字の音訓を借りて、朝鮮語を寫さんと企てたるも、廣く行はれずして、漢文の捨假名にのみ用ひられ、今日に至れるものゝ稱なり、其樣は頗る我國の萬葉假名に類す、例へは

孟子伊曰孩提之童伊無不知愛其親是齊及其長也國也隱無不知敬其兄也羅國時尼羅

の如し諺文は全くこれと異なるものにして、其製作の時代は、普通現朝鮮第四代の王世宗の二十八年（西曆千四百四十四年）なりとすれど、予は其起源尙少しく古くして少くとも高麗朝の末葉なりと考ふ、但し廣く天下に公布して、王國の國字と制定せしは世宗の時にあり、而して其字躰の起源につきても諸說ありて一定せず、或は

古篆に倣へりとし、或は梵字に出たりとし、又は蒙古字に基けりとす、エドキンス氏の如きはこれをセミチック文字の變体なりとし、諸家の說區々たりと雖ども、予は別に自家の說として主張する所あり、予の考ふる所によれば、諺文は少數の基礎を梵字に取り、其他の大部分は、朝鮮語聲音の精緻なる研究に基き、合理的に組み立てたる者にして、此種の文字は他に其類を見ず、世界唯一の科學的國字なり其構造の詳細は今此に述ぶると能はずといへとも、先づ其一端によりていへば、朝鮮語の聲音を其性質によりて分類し、相似たるを集めて一群となし、其中を再び音の强弱によりて分ち、此等の關係を文字の形に現はしたり、例へばs ch ch'の諸音は等しく顎音に屬し、s最も弱く、chこれに次ぎ、ch'は最も强き音なるが故に、此等を文字に表はすには、先つ∧字をs音と定め、chには別段文字を造らずして、∧字の上方に一を加へて一∧となし、s音の强きものなることを示めし、ch'はまたchの激音なれば、一∧上に一點を加へてこれを表はせり。

構造　∧

諺文　一∧＝∧＋－

發音　s　一̇∧＝一∧＋－

ch　一̇∧＝∧＋－＋、

ch'

こは唯一例を擧げたるのみなれど、其他の場合も概ね皆同樣の構造を有せり、故に予はこれを稱して、科學的文字とするを憚からず、唯惜むらくは其綴字の法、全く漢字の組立法に擬せるが爲め、本來は一字一音体なるにも係らず、其形の上よりは一字一綴体の文字と化し終れり、然れども諺文の本質に至つては毫も損せられず依然として科學的なり、故に予は諺文の構造他の文字と異ることを、廣く學術界に報告してこれが爲めに、文字史上新たなる位置を請求せんとす、（吏道及諺文に關しては、嘗て言語學雜誌に掲載したる『諺文の起源』、『假字の起源に就きて』の二文あり、相參照せられんことを希望す、）

第五　支那文字

予はこれより我國字の性質を論せんとするに當り、順序として此に先づ漢字の事につきて概畧述ぶる所あるべし、凡そ世界の中に、支那の如く文字に富みたる國はあらず、其數に於ては既に數萬の多きに達し、其性質に於ても亦殆んど文字の各種類を網羅せり、即ち繪畫に始まり象形に進み、遂に寫音の域に達し、其勢力の及ぶ所獨り自國の內に止まらず、凡そ東方に國するものにして、漢字の影響を蒙らざるはなきに至りぬ、これを西にしては、埃及の文字が幾千年を經由して今日の歐洲に傳はれると、兩々相對して文字界の偉觀たり

支那の學者は文字の種類を分ちて象形、指事、會意、諧聲、轉註、假借の六種とし、これを

六書と名けたり(六書の事は學友桑原隲藏君『教育學術界』に漢字の說と題したる論文中に詳しく述べられたり)象形とは馬魚車等の如く其の實物の形狀を象どりて造れるもの、指事とは本が木の下邊を示めすが如きもの會意とは木と日とを合せて東を造るが如く、二箇以上の文字重なりて、新意義をなすものをいふなり、然れども此等は皆等しく我等の所謂象形字にして、唯一々別箇の文字を造らば無窮に其數を增すの憂あれば、既成の文字を合成して、これに新意義を加へたるに過ぎず、されど假令材料に古きを用ふとも、かくてなれるものは結極新なる文字なるが故に、此に始めて寫想躰より脫して、寫音躰の文字たるべき端緒を開けり、其初になれるものを諧聲と稱し、既に前文に述べたるが如く、例へば分より份、妢、芬、忿、玢、氛、盆、粉、紛等を造り代より岱、玳袋、貸、黛を造る類なり、但し支那語にては同音異義の語餘りに多き故、若し分、代等の原字を其儘に使用して、之に凡ての異義を負はしむれば、忽ちに混亂する恐あるが故に、これに最も簡易なる象形字を加へて、區別の標準とはなしたるなり、次に轉註とは文字の別種類と見るよりは寧ろ意義の轉換とする方可なるものにして、例へば咽喉の咽字もせぶの義となり、汚穢の汚字そゝぐの意に用ひらるゝ類なり、最後に假借とは同じく寫音文字の一種にして、これはまた全く他の象形字の補助を借らず、原形のまゝにて、同音の他語に用ひらるゝこと、例へば蓋の何不を表はし諸の之於を表はすが如し。

此の如く漢字は象形文字と寫音文字との二を兼ね、殊に象形文字としては其發達を極めたるものなれども、奈何せん其國語の性質上寫音文字として充分なる生育を許さず、僅に其中の最も下級に位する一字一語の文字にて止まれり、これ一々支那語の構造一語一綴なるによるものにして、語を離れて一綴の音を考ふるに至らず、況んや一音の觀念を得ること能はざりき、故に漢字の性質を一變してこれを上級の文字となしたるは、支那自身にあらずして、言語の性質異なる他の二國、即ち朝鮮及び我日本なりき。

第六　吏道

朝鮮は其人種言語に於て支那との關係甚だ薄きにも係らず、境域相隣れるがため、箕子東來の古より支那文化の影響を受くること夥しく隨て文字も亦古くより漢字を用ひたり、然れども朝鮮の國語は言語學上アグルチニーレンド(附着語と稱する多綴語にして支那語の如き單綴なるイソリーレンド(孤立)語とは全く性質を異にし我日本語と其系統を同じくせるものなれば、漢字が朝鮮に輸入せられたる後は言文全く二途に分れ、讀み書きはたゞ漢學の敎育あるものゝ間にのみ行はれたり、若しかくてのみ止まんには、折角の文字も僅かに學者間の利器たるに過ぎずして、一般の社會は其恩澤に浴すること能はざるべし、此に於て先づ漢文を譯讀することと、即ち韓地の方言を以て漢文を訓讀する方法を案出せり、新羅の人薛聰の傳に、

聰性明鋭生知道以方言讀九經義訓導後世至今學者宗之（三國史記列傳六）とあるを見れば當時の形勢も亦察するに難からず、かくて文字の一面を味へる彼等は更らに進み て自國の語を寫すべき漢字の新用法を工夫し、こゝに吏道の發明あり。

既に上文述べたるが如く、支那と朝鮮とは國語の性質を同じくせざるが爲め、漢文を訓讀するに當り、恰かも我國にてヲコト點を付したるが如く、豆爾波、助動詞等は多くこれを添入する必要あり、吏道發明の動機は蓋し此間に存す、即ち

孟子（伊ガ）曰孩提之童（伊ガ）無不知愛其親（是ヲ於）及其長也（爲テ也ヘ隱）無不知敬其兄也（羅爲ノ時マ尼羅ヲ）

の如く漢文と混へて用ひ、我國の捨假名と同一の用をなせり、細書せる漢字は吏道にして、これに付したる片假名は其意義なり。

かくの如く、吏道は常に漢文に伴ひて用ひられ、言辭を重ずる歌詞に於てすら、なほ多少の漢語あるを免れず、遂に朝鮮の國字としては成功すること能はざりき、かく初より發達の不完全なる吏道は、諺文の發明以後一層其勢力を削減せられ、今日には於ては僅かに胥吏の用文中に其餘喘を保てるに過ぎず、吏道といふもまたこれより起れる稱呼にして、道は一に吐とも書し、助辭の義ある韓語なり。

然れども文字として吏道を見る時は、漢字よりも勝れたる性質を有す、漢字は前にも述べたるが如く、假令其中の最も進歩したる寫音躰のものといへども、尚一語全躰の音を寫せるに過ぎざれど、吏道に至つては然らず、一語を組織する各綴を分離して、これを別箇の文字によりて表はせり、これ一字一綴の文字たる漢字を借りて、多綴なる朝鮮語を寫さんとするに當りて起るべき必然の結果たるに過ぎざれど、文字史上より觀察すれば、確かに一段の進歩なり、即ち聲音の觀念に於ては稍分解的に進み、文字の數に於ては彼に比して著しく減少せり。

吏道は漢字の朝鮮音訓を利用して朝鮮語を表せること、全く我萬葉假名の我國語に對すると、同一工夫に出てたるものにして、蓋し我萬葉假名は彼の吏道に擬せしものなるべし、吏道の用例は三國遺事へ數首の俗謠を載せたる外、古代の地名人名等にも見えたれど、其最も多く今日に傳はれるは漢文の捨假名なり、左に錄するところのものは、韓本『倭語類解』と稱する日本語字彙の卷尾に、口訣として擧げたる中より採れり。

附錄

吏道	和譯	備考
隱	ア	隱の音發音 *eun*
伊	ガ	伊の音發音 *i*
刀	モ	刀の音發音 *to*
萬	バカリ	萬の音發音 *man*
也	コソ	也の音發音 *ya*

乙奴　カラ
爲羅　セイ
爲加尼　シタニ
爲巨飛　シタヲ
伊於乙　スルヲ
爲邑加尼　イタシマシタニヨリ
爲乙之羅刀　スルトイウテモ

乙奴の音發音 *eul-lo*
爲の訓と羅の音發音 *hŭ-ra*
爲加の訓と尼の音發音 *hŭ-tĕ-ni*
爲と飛との訓と巨の音發音 *hŭ-kĕ-nal*
伊於乙の音發音 *i-ĕ-neul*
爲加の訓と邑尼の音發音 *hŭ-eup-tĕ-ni*
爲乙之羅刀の音發音 *hŭ-eul-ĕli-ra-to*

かくの如く朝鮮に傳はりたる漢字は、吏道となりて漸く一生面を開かんとせしも、不幸にして完全なる發達を遂ぐること能はざりき、然れども此處に蒔かれたる種子は、日本の地に於て再び發芽し、遂に萬葉假名の花を開き、片假名平假名の實を結ぶに至れり。

第七　萬葉假名

漢學渡來後我國の學者がなしたる苦心は、朝鮮の學者が嘗てなしたると同一にして、言語の性質異なる外國の文字を轉用して、自國の語を寫さんとするにありき、其結果彼等の案出せるは所謂萬葉假名にして、漢字の音訓を應用して國語を寫せる樣、朝鮮の吏道と酷だ相似たり、然れども萬葉假名の使用は其範圍甚だ廣くして、吏道が僅かに漢文の捨假名に止まれると同日の比にあらず、隨て音訓借用の上にも

多くの種類あり(一)阿、加、久、古の如く、一字の音を借りて一音若くば一綴音を表せるもの(二)安、丹、南、仁の如く、字音の一部によりて一音若くば一綴音を表はせるもの(三)一字の音によりて二綴音を寫せるもの、例へば樹瞻越乞の類(四)一字の訓によりて一音若しくば一綴音を寫せるもの、例へば余、卯、香、衣の類、(五)字訓の一部を以て一音若しくば一綴音を表はせるもの、例へば足、飛、猿の類、(六)一字の訓によりて二綴音を寫せるもの例へば言借(イフカリ)(憑恨の義)白無(シラナシ)(無知の義)夏借(ナツカシ)(昵懷の義)の類等の外、向南山(キタヤマ)義之(ヨシユキ)(主義之は手師(テシ)なればかく用ひたり)の如く其意義を轉用せるもありて、縱橫無盡殆んど餘す所なし。

吏道と萬葉假名との關係につきては、從來はまた何等の說をなすものあらずといへども、同一創意に出でたる此二種の文字は、必らず別箇に發達せしものにあらざるべし、其用法の相似たるが上、漢文に混へて細書せらるゝ樣など、相對照せば思ひ半ばに過ぐるものあらん。

如此久失氐波天皇我朝庭爾仕奉留官官人等乎始氐天下四方爾波自今日始氐罪止云布罪波不在止高天原爾耳振立開物止牽馬立氐今年六月晦日夕日之降乃大祓爾被給比清給事乎諸聞食止宣四國卜部等大川道爾持退出氐祓却止宣『大祓』

長幼際天倫之序羅兄之所以爲兄果弟之所以爲弟伊長幼之道伊所自出也羅蓋宗族鄉黨厓皆有長幼爲尼不可奈也羅『童蒙先習』

なは次節『片假名と吏道の畧躰』の條を參照すべし。

第八　平假名及び片假名

平假名を空海の作とし、片假名の作者を吉備眞備とする說あれど、いづれも信じ難し、畢竟は一二の人の作にあらずして、漸次に發達せるものと知らる、即ち萬葉假名の漸く行はるゝに連れて、字劃の多きは使用上不便なれば、これを行書とし、更に草書とし、又其中を淘汰して、字躰の最も簡易なるものゝみを存するに至れるなり、例へば hn 音を表はすに、波、破、播、幡、盤、藐、者、八等の中よりは（波）、は（者）、ハ（八）、の三字を出せるが如く、初より決して一定の字躰定まれるにはあらず、今もなほ以呂波には別躰の文字多し、かくて自然に發達せし文字の一躰を稱して、平假名又は草假名といふ、勿論かく多くある文字の中より、字躰の最も適切なるものを撰擇し、これを今樣躰の和讃に咏みたるの功は空海にあるべし。

片假名の作者を吉備眞備とする說も亦採るに足らず、蓋し字書を省略するは我國人の創意にあらず、漢籍の中にも古くより韵を勻掃を帚蛇を它とする等の例多く、我國に於ても螟蛉を吳公、他を也、弦を玄とし、村を寸、伎を支、倭を委とするの類、遠く古事記萬葉集の古に見ゆ、而してかの吏道の略躰はまた漢字の偏旁點劃を省畧するになりて、其字躰の我片假名に酷似するもの多く、兩者の間連絡あるものゝ如し、さて片假名を五十音圖に並列せしは、眞言の僧徒が印度の音韵法に倣ひたるなり。

第九　片假名と吏道の畧躰

吏道の畧躰はまた頗る我片假名に類似し、漢字の偏旁、點劃を省き、其音訓を用ふる樣全く相同じ、

（一）字音によるもの

（甲）漢字の一部を取れるもの

片假名　吏道

ロ　呂の上半　丁　面の上半發音 *mjen*

ホ　保の下半　弋　代の傍發音 *tai*

ヌ　奴の傍　口　古の下半發音 *ko*

（乙）漢字の全躰を取れるもの

八　八の全躰　五　五の全躰發音 *o*

（二）字訓によるもの

（甲）漢字の一部をとれるもの

ト　止の上片　飞　飛の上半發音 *nai*

エ　江の傍　ソ　爲の上半發音 *hui*

（乙）漢字の全躰をとれるもの

チ　千の全躰　加　加の全躰發音 *ti*

殊に奇とすべきは、吏道片假名とともに同一漢字の省畧よりなれるもの數種ありて、例へば

漢字	片假名	吏道	吏道發音
伊	イ	イ	*i*
乎	ヲ	乎	*ho*
於	オ	今	*o*
也	ヤ	ㇷ	*ya*
奴	ヌ	ヌ	*no*
多	タ	タ	*ta*
爲	メ	ソ	*ha*（爲の韓訓）

の如く偶然の暗合と見るべからざるものあり、吏道の畧体に擬して片假名を作りしものか、或は彼の吏道が我片假名に倣ひしものか、いまだ俄に判じ難しといへども、上代の韓國は常に我指導者の位置に立ち、特に文字に於ては我に先んじて、遂にアルファベット体の諺文を制定せるに反し、今に至るまで我國の假名を固守して止まれるを思へば、先づ漢字を得たる彼朝鮮に於て、假字体の文字發芽せりとする方、寧ろ本末を得たりといふべからん、たゞ惜むべきは文字として更らに上乘なる諺文が、發明の當事より我國に傳はらざりし一事なり、若しこれに假すに發達の餘地を以てせば今日世界に於て有數の文字たるべかりしを獨り好事者の手に飯して神代文字の一隅に孤立せるは實に千載の恨事なり。

第十　假字に關する結論

我國假名文字の由來はかくの如く、漢字が言語の性質異る朝鮮を經て日本に傳はり、此等の國語を寫さんとするに當りて、自然に起れる結果なり、然れとも其進歩が一字一綴躰に止り、尚進みて一字一音體即ち最上寫音文字たること能はざりしも亦國語性質の然らしむるところにして、奈何ともすべからざるなり、蓋し古代の我國語は聲音の組織比較的單純にして、綴字の種類も亦一母音、一子音十一母音の二者を出てず、子音十母音十子音、若しくは母音十子音の如きはこれを見ることなかりしかば、漢字を假りて國語を寫すに當りても、例へば安(an)より a 音、丹(tan)より ta 若しくは tani、難(nan)より na 又は nani を轉するが如く、語尾の子音は全く脱落するか、或は別に一母音を加へて一綴をなさしめ、一子音を分離して表出する必要なかりしかば平假名片假名に至りても其進歩は一字一綴體に止まりしなり。

かくの如く、假名文字は當時の國語を寫すに於て敢て不便もなかりしなれど、言語は時と共に變遷し、聲音の組織もまた昔日の如くならざるに連れて、漸く不足を感し或はん、ンを以て n 音を表はし、゛、゜點を付して濁音半濁音を分ち、以て一時を彌縫せしが、近世諸外國と交通の結果、各種の聲音混入するに隨て、假名の聲價愈墮ち、

遂に國字改良の聲を聞くに至りぬ。

第十二　國字改良問題

假名文字既に今日の國語を寫すに不適當とすれば、如何なる文字を以て之に代ふべきか、假名に改良を加へんか、羅馬字を採用せんか、或は又新字を造るべきか、當てかなの會、羅馬字會あり、近くは新字を唱ふる人も出でしが、いまだ一の成功なく、國字改良は今尚未決の問題たり。

若し單に理論上よりいへば、完全なる文字は無論一字音體にして、少くとも左の四資格を備へたるものなるべし、

一、獨立したる一音は必ず獨立したる一文字によりて表はさるべき事

二、同一文字をして別種の音を表はさしめざる事

三、同音を表はす各種の文字あるべからざる事

四、綴字中に發音せられざる文字あるべからざる事

然れども實際上に於ては、しかく簡單ならず、假名に比して羅馬字勝れたればとて千年の歴史を有する彼を捨てゝ此を取ることの果して可なるべきか、國字は其國語を寫すを以て足れりとす、然らば我國語の性質上一字一綴體一字一音體との優劣いまだ俄に判ずべからず、故に我國語調査委員會も其決議に

文字に音韻文字（フォーグラム）を採用することゝし、假名、羅馬字等の得失を調査

することゝして疑を存せり、殊にまた茲に完全なる新文字を制定し得たりとするも、全く新なる文字を普及せしむる事、社會の現狀に於て果して爲し得べき事業なるか、朝鮮か其新國字諺文を定めたる時、國王を以てこれが製作者と稱し、其淵源を神秘の中に葬りし等、當時苦心の趾を想へば吾人頗る其成功を危む。

此他尚數多の解決すべき問題ありて、國字改良の前途容易ならず、就中國語調査會が其調査方針の一項に、國語の音韻組織の調査を加へたる如く文字の職掌が言語の聲音を寫すにある以上は、國字を議するに當りて、其國語の聲音を調査すること、實に先決の問題たり、吾人も亦これより章を改めて、國語の聲音に關する概要を述べむとす。

第二章　聲音論

第一　聲音の起源

聲音とはある彈力性物質の急速なる振動に始まり、空氣これを傳へて吾人の耳を刺激するによりて起る感覺をいふ、而して空氣も亦最彈力性を備へたる物質の一なれば、他の物體の振動を聽覺に傳ふる媒介者たるのみならず、自己獨立に振動の主躰ともなるが故に、聲音に關しては最も必要なる條件物の一なり、而して此等の

振動が空氣を經て吾人の耳に達するには常に波狀をなして進行す、因てこれを音波と名づく。

第二　聲音の種類

音波の形に規則正しきものと、不規則なるものとあり、これによりて聲音を二種に大別すべし。

規則正しき音波、即ち一定の時間毎に同一の波形を繰り返へすものより、起る音聲を稱して樂音といひ然らざる不規則の音波より起るものを騷音といふ。

樂音はまた左の三點より觀察してこれを區別することを得、

(一)　強弱即ち音の大小
(二)　調子の高低
(三)　音色

音の強弱は音波の高さによりて定まる、即ち波動高ければ聲音隨て強く大に、波動低くければ弱く小なり。

調子の高低は音波の速力、即ち一秒時中に振動する波動の數と比例す、吾人の聽き取り得べき最低調の音は一秒時に三十振動をなし、最高調のものは四千振動をなすものなりといふ。

音色は音波の形によりて定まる、凡そ如何なる音も一音波のみよりなれるは極めて少く、大抵は數種の音波相集まれる結果にして、恰かも太陽の光線が七色の集合よりなれが如し、而して此等の音波は其速力1、2、3、4……の比例を保ち、甲の音波一波動をなす間に、乙丙丁は二波動、三波動、四波動をなす割合なり、其中波動の數最も少き音波を稱して、主音波といひ、其他を副音波といふ。

音波の形は此等の副音波の強弱多少によりて變ず、音樂に熟達せざる人の耳は容易に此副音波の存在を覺知すること能はずといへども、恰かも三稜鏡を以て日光を七色に分析し得るが如く、諸種の實驗によりて、一音を組織する音波の種類を認め得べきのみならず、一定の裝置を以て、任意に副音波の增減を行ひ、延いて其音色を變更すべし。

第三　音の共鳴

今一の物躰を取りてこれを其音波の內に投ずるとき、若し其物體固有の主音波、この音波中の或物と同一なるときは、これに感じて自から鳴動すべし、これを音の共鳴といふ、例へば主音波副音波b、c、d、よりなるA音波中に、主音波bを有する物躰を投ずれば、自から共鳴して、更に一b音波を增加し、ab^2cdとなりて、結極A音波の音色を變更す、若しc主音波の物體を投ずればabc^2dとなり、いづれもA音波の音色を變更すべし、而して物體に彈力性多ければ、音に共鳴すること愈甚し、故に空氣の一定の量を區劃してて用ふれ

ば、共鳴室とて最も適當なり。

第四　人類の發聲機關

人類の發聲機關は三個の主要なる部分よりなる、(一)呼吸機(二)咽喉(三)調聲管これなり。

呼吸機は最下層に位して聲音の原料たる氣流を發送す、咽喉其上部にありて、此氣流より樂音(稀には騷音)を作り調聲管は最上部に於て共鳴室となり、此等の聲音を變化し、或は自己獨立に騷音を作る。

一、呼吸機

呼吸機は肺臟と氣管とよりなる、左右兩肺に於て無數の枝を咲かしたる氣管枝は集まりて一枝の氣管となり、上部は咽喉に連なれり、而して胸部諸種の筋肉及び横膈膜の伸縮は交々肺臟の縮張を促がし、此に呼吸作用を生ず、然れども呼吸機は唯聲音の原料たる氣流を送るに止まりて、いまだ聲音其物には直接の關係なし。

二、咽喉

咽喉は氣管より送られたる氣流を聲音に變ずる要處にして、五個の軟骨より圍まれたる一室なり、此室の中部より少しく上方に、粘膜を以て蔽はれたる二條の筋肉前後に亘りて咽喉を横斷せり、これを聲帶といふ、此二條の筋肉は、これに附着する諸種の軟骨の運動によりて、自由に伸縮し、其中間に横はれる空隙を開閉す、普通の呼吸に際しては、聲帶左右に開きて、氣流の通過を妨げずといへども、發聲の場合に臨みては、相迫りて、中間僅に一條の間隙を殘すに至る、故に氣流其間を排し出づれば、彈力性の筋肉は振動を起し、此に始めて一種の樂音を生ず。

振動すべき物體の長短はこれより起る波動の速力(即ち其聲音の調子の高低)と反比例をなす、故に聲帶の長短は音聲の高低と密接の關係あり、今成年の男女間に就きてこれを比較するに、大凡三分の一の差あり、即ち充分に張りたるとき、男子に於てに約二十三、六分の一ミリメートル、女子にありては約十五、三分の二ミリメートルなりといふ、これ女子の聲男子に比して、一般に音調高き所以なり。

三、調聲管

聲帶より上部に位する凡ての腔間を總稱して調聲管といふ、其内に咽喉腔、喉頭腔、口腔、鼻腔の別あり。

咽喉腔とは聲帶より上部の咽喉に屬する腔間を指せる名にして、其上方に喉頭腔あり、喉頭腔とは聲帶より上部の咽喉腔との間には咽喉蓋と稱し自由に開閉する瓣樣の軟骨あり、上の方鼻腔との間には、これまた開閉の自在なる懸壁垂ありて其境界をなし、唯口腔との間のみは何等の墻壁なくして相通ぜり口腔は唇、齒、舌、上下兩顎骨等によりて取圍まれたる一室なり、殊に舌、唇、下顎骨は獨立の運動をなし、口腔を千變万化ならしむるが故に、口腔は調聲管中最も重要なる

部分なり。

鼻腔は喉頭腔の上部兩鼻に通ずる腔間にして、口腔の如く其形を變ずることなし以上咽喉腔より鼻腔口腔に至るまでの諸腔間は常に空氣を以て滿され、且口腔は其形を變じ、鼻腔の通路は懸壅垂を以て開閉せらるゝ故に、調聲管内に閉ざゝれたる空氣の形は殆んど無窮に變ず、かくて聲帶の振動より起る音波は、必らず此等の調聲管の一部、若しくは全部を通過せてはロ外に出づべからざるが故に、此に空氣の共鳴を起し、隨て音波の性質を變じ、種々の音色を生ず、而してこの調聲管により て造らるゝ共鳴室の形は千差萬別窮なきを以て、人類聲音の音色も亦其種類無數に多し。

第五　發聲機關各部の作用

普通の呼吸は無意識の間に行はるゝものにして、其際肺臟と外氣との交通に何等の障礙なし、即ち聲帶は全く開放せられ、懸壅垂は下方に垂れて鼻腔の通路を開き舌は口腔の下部に横り、唇は堅く閉ざゝれたり。總てかくの如き姿勢を稱して、發聲機關の停止といふ。

さて發聲せんとする場合には、此等の姿勢を一變して、發聲機關の各部に特別の運用をなさしめざるべからず。

(一)　呼吸機

發聲の時に於ける呼吸機は、胸部諸種の筋肉の作用によりて深呼吸をなす、即ち此際の呼吸は有意的にして、發音の强弱長短等によりて加減せらる。

(二)　咽喉

發聲の原料として肺臟より送り出されたる呼氣は、咽喉若しくは調聲管の一點にて其通路を塞がれ、此妨害を排除せんとするがために、始めて聲を生ず、咽喉に於て此障碍物たるは即ち聲帶にして、普通呼吸の際に全く開放したるもの、發聲のときには漸次收縮して通路を狹ばめ、或は全く閉塞するに至る此等妨害の程度異るに連れて、これに對する呼氣の抵抗力にも亦强弱の差あり、即ち聲帶の全部閉されたる場合には、呼氣は其全面に向て强く突貫し、これを上方に排除して、此に聲帶の振動を起す、其結果として生ずる樂音はこれを稱して聲音といひ、母音鼻音濁音等の材料となる、聲帶若し全く閉ぢずして、尙幾分の間隙を存する場合には、呼氣の抵抗微弱にして、聲帶を振動せしむるに至らず僅に摩擦を起して騷音を生ず、これを咽喉騷音と稱し、密語等の原料となる。

(三)　調聲管

母音鼻音等は前記の聲帶より起る聲音を原料としてなれるものなれども、他には又少しも此聲音に據らずして出ずる語音あり、例へばptsk等の音を發する場合を見るに、肺臟より吐出する呼氣は、何等の滯なく咽喉を通過して、毫も障碍を受

くることなし、故に此等の語音に對して、咽喉は何等の關係なく、局外の位置に立てり、然れども呼氣は何處かにて其通行を妨げられずんば、語音となること能はずとせば、此等の音は何れにて發生するか。

聲帶の關門にて變化せらるゝとなく、肺臓より出でたる儘の呼氣は調聲管の何處かにて第二の關門を發見す。即ち其一部に於て通路全く閉塞するか、或は非常に狹まり、呼氣のこれを破りて突出せんとする際に、一種の騷音を生ず、而して此騷音の種類はその關門の位置異なるに從ひて變ず、例へば唇部にてp音、喉部にてk音を發するが如し、故に咽喉にあらずんは調聲管、調聲管にあらずんは咽喉、何れか一方に於て、又或は雙方に於て、一旦其通路を妨げられずんば、語音は遂にならざるなり。而して、咽喉は、ptk音の如き場合には、中立の位置に立つことありといへども、調聲管は如何なる場合にも、必らず語音の成立に關係を有す、例へば母音aの如き、其の實質は聲帶の振動より起る聲音なりといへども、其音波の外氣に達する中間に調聲管位するが故に、音波通過の際、これに共鳴して其音色を變ずべし、故に吾人の耳にするa音は、聲帶の振動より起る音波其儘のものにあらずと知るべし、而のみならず、各種の母音を作る音波は、其源即ち聲帶より出づる時に於ては、盡く同一種にして、aiueo等の各種に分かるゝ原因は、實に中間に横はる調聲管の形種々に變じて、各種の共鳴室を造るにあり、故に調聲管は自から通路を閉塞して直接に

語音の源となり、又共鳴室として聲音の音色を變じ、かくて語音構成上に二樣の作用をなす、特に共鳴室としては、如何なる音にも關係せざることなく、語音の起源聲帶より起る聲音にあると、調聲管より生ずる騷音にあるとを問はず、必ず共鳴して其音色を變ず、唯後者に於ては前者に比して共鳴室狹きが故に、其影響も亦比較的僅少なるのみ。

之を要するに、人類聲音の發生は、常に左の三條件に伴はる。

(一)有意的に加減せられたる一定の呼氣、

(二)咽喉及び調聲管の中、何れかに於て呼氣を閉塞する關門、

(三)調聲管の共鳴作用、

以上の三條件中、呼氣の强弱長短、關門共鳴室の位置程度等に應じて、聲音各種の差異を生ず。

第六　語音の分類

(一)　語の組成分

語は綴よりなり、綴は音よりなるとは、普通に唱ふる所なれども、いまだ精密なる定義なりといふべからず、先づ別箇獨立の數音を臚列したるもの、即ち音の集合躰はいまだ綴又は語と稱するに足らず、例へばameの三音を別々に發音して、たゞこれを並列したる計りにては、いまだ雨といふ語をなすに至らず、かくてはaとm、m

とeとの間に、發聲機關は一々原位置に復して、音の杜絶を生ずれはなり。

所謂綴又語は、文字に表はすときこそ、別箇の文字を連ねて記せども、其實首尾貫徹せる一の音躰にして、上例によりいはゞ、兩はa＋m＋eにあらず、aよりmに移りmよりeに移る中間にも、聲帶の振動を受けたる氣息は絶えず流出して、共鳴作用を生ぜしむるが故に、aにもあらずmにもあらず、又mにもあらずeにもあらざる一種の音を出して、ameの間を連續し、これをして連結せる一の音躰たらしむ。

此等の音は一音より他の音に移る過渡の時代に生ずるものなれば、發聲機關につきて一定の位置を示し難く、隨て獨立の資格なし、即ちal am an ap等、隣音の異るに連れて盡く變ず、今假りにこれを名けて渡音と稱す。

然れどもまた、語は徹頭徹尾盡く音より組成せられたりといふべからず、例へばRappa(喇叭) Hakku(海苟)の如き語は、最初のpkにて全く調聲管を閉し、次のpkにてこれを破裂せしむるものなれば、其中間に於て音は一時全く杜絶すべし、されば音の停止も亦、語の組成分の一に數へざるべからず。

而して破裂音は、かの調聲管に一定の姿勢を保ちて發する音、假りにこれを定位音と名づくと異りて、其姿勢を破りたる時に於て、始めて成立するものなれば、今この兩者を區別して、語の組成分を列擧すれば、要するに(一)定位音、(二)破裂音、(三)渡音、(四)音の停止の四者に歸すべし。

(二)　子母音の區別

語音を子音と母音とに分つは、古來より慣用の分類法にして、實用上亦甚だ便益多ければ、今敢てこれを改むる必要なしと雖ども、研究者の眼より見れば、此分類法も亦分明ならざる所あり、古人が半母音(w yの類をいふ)の名目を設けたるは、亦以て此兩者間に明白なる區別なきを證するに足る、尙これをいはゞ、かのm n r lの如き音は、人皆これを子音に數ふれども、こはその綴字上の作用に基く觀察にして、若しこれを其實質上より論ずるときは、此等の數音は母音と何等の異なる所なし、かく其實質と作用との異ることは、世の所謂母音にもあり、即ちかの半母音と稱するものは、子音の作用をなす母音に外ならず、而已のみならず、其作用に於ても亦母音と異ることなき子音あり、Written(Writtn と發音す)のn音の如きこれなり。

故に、或學者は Consonant(子音)を Vowel(母音)と對照せしめず、新たに Sonant(假りに主音と譯す)に對する Consonant(主音に對して從音と譯す)を定む、其說に曰く一綴の中必ず音の高低あり、其最も高き所は主として響き、他はこれに伴ひ從ふ、故にこれを主音從音と名くべし、ap anの如きものにては、n主音にしてp n從音たり、又 writ-ten の ten (tn と發音す)にては、n主音にしても從音たり、故にn l m等は、其作用によりて、或は主音ともなり、又は從音ともなることあるべしと。

かくの如く論じ來れば、子音母音の區別既に其根本に於て分明ならず、況んや其他

の細かなる分類に於ては、此に宜ければ彼に惡く、全躰に貫通する分類法は到底成立すべくもあらず、例ばm音は聲帶の振動よりいはゞ、母音と類を同くし、鼻腔の通路を開くに於て、鼻音の特質を有す、又若し其兩唇を閉づる上より論ずれば、他の唇的閉塞音と何等の差異なし、故に此等の特質中、一のみを擧げて分類せんか、甚だ粗漏たるを免れず、又若し其盡くを擧げんか、分類の事遂になすべからざるを奈何せん、要するに根本的の分類法は遂に不可能の事にして、我等の今日採る所のものはある一方面の觀察に基きたるものなれば、他の方面よりすれば、亦別種の分類法あるべき理なり。

（三）調聲管操縱の種類

調聲管各部をして、其音の發するに適當なる態度を取らしむることを、Articulation（假りに操縱と譯す）といふ、今調聲管操縱の種類によりて音を分類すれば、先づ鼻腔通路の開閉によりて、鼻音口音の二種を生ず。

鼻音とは、懸壅垂喉腔の後壁を離れて、鼻腔の通路を開き、これをも共鳴室たらしむる場合の音をいふ、n m ng等これなり。

口音とは、懸壅垂後壁に接して、鼻腔の通路を塞ぎ、全くこれと絶縁したるときの音をいふ、其中に左の各種あり。

(1) 口腔開きて氣息の通過を妨げざる場合、此時口腔はたゞ共鳴室の作用をなすのみにして、自己單獨の騷音を造らず、例ば母音の如き所謂樂聲音（Sonorlaut）なり。

(2) 口腔の一部相接近して氣息の通路を狹め、此處に摩擦的騷音を生ずる場合、例へばf sの如し、これを摩擦音と名づく。

(3) 口腔の一部全く接觸して、氣息の通路を閉ざす場合、例へばp t kの如し、これを閉塞音と名づく。

以上の三種類は、鼻腔と無緣の場合に付きての論なれど、これと同時に、鼻腔と關係を有する時もあり、よりて左の二種類を生ず。

(4) 懸壅垂後壁に接して、全く鼻腔との關係を斷ちたる場合、これ即ち所謂口音なり。

(5) 懸壅垂垂下して、鼻腔の通路を開きたる場合、即ち所謂口鼻音なり。

上記の三種類の各に就きて、此二種を假定すれば、總計六種の操轉を生ず。

(一) 母音及r l音、叩ち所謂樂聲音。（1、4）
(二) 母音及r l音の鼻聲を帶びたるもの。（1、5）
(三) f s等の摩擦音　（2、4）
(四) 摩擦音の鼻聲を帶びたるもの。（2、5）
(五) k t p等の閉塞音。（3、4）

(六) m n 等、所謂鼻音。

以上の中、(一)(三)(五)(六)は最も普通のものなり。

(四) 調聲管操縱の位置　(3、5)

調聲管の或點全く接觸するか、又は相接近して聲音の各種を生ずること、既に前節に述べたり、其接觸又は接近の箇所種々あり、これを操縱の位置といふ、例へば、p b m に於ては此位置は唇にあり、f 音に於ては上齒下唇にあるが如し。

此位置は理論上殆ど無數なれども、暫く其中の標準たるべきものにつきていはゝ先づこれを唇音顎舌音の二種に分つべし。

(甲) 唇音を、齒の關係すると否とによりて、兩唇音と唇齒音との二に分つ。

(一) 兩唇音とは、上下兩唇の全く閉塞するによりて生ずる音にして、例へば p b m の如し。

(二) 唇齒音とは、上齒と下唇と輕く相觸れて、其間の摩擦より生ずる音にして、f v 等これなり。

(乙) 顎舌音は上顎と舌との接觸より生ずる音にして、其中上顎は不動、舌は變形窮なし、先づ上顎につきていはゝ、軟口蓋より硬口蓋の前部に至るまで、其接觸點異るに連れて、各特有の音を發す、故に理論上其種類は無數なれども、便宜上大別してこれを前中後の三域に分つ、されば此三者には、其間判然たる區劃なく、互し相融通する

餘地あることを認めざるべからず、次に舌の運動に就きていはゝ、中心側面の二種あり、中心操縱とは上顎の中央線に沿ひて、前後に運動するものにして、その中舌端を用ふるものと、舌背を用ふるものとの二種あり、側面操縱とは上顎の中央線によらず、舌の兩側を用ふるものをいふ。

以上別々に述べたる、舌と顎との位置を合併して、左の數種を生ず。

(甲) 中心操轉

(一) 前部

(1) 舌端

(a) 捲舌音　舌を捲き、其裏面を上顎に觸れて發する音にして、梵語 ṭ の如きものなり。

(b) 齒音、正しくは齒槽突起音、舌端を齒槽突起に觸れて、發する音なり、例へば t d n の如し。

(c) 齒背音　舌端を上齒の背面に觸れて發す、英語 th の一種。

(d) 齒間音　上下兩齒間に舌を挾みて發する音にして、英語 th の一種はこれなり、

(2) 舌背

殆んど舌端音と同樣の種類あり、唯彼は舌端を用ひ、これは舌背を用ふる

の差あるのみ。

(二)中部　舌背を硬口蓋に觸れて發するものにして、所謂顎音これなり。

(三)後部　舌背の後部を軟口蓋に接して發す、所謂喉音これなり。

(乙)側面操縱　舌の兩側と上齒の兩奥とを接近し、左右兩道に氣息の通路を造るものにして、e音は即ちこれなり。

(五)咽喉操縱の種類　咽喉操縱の重なるものは左の三種なり。

(一)聲門全く開きて、空氣の通過を妨げざる場合。

(二)聲門稍狹まりて、空氣其間を通過するとき、聲帶の緣に觸れて、微かに騷音を起す場合。

(三)聲門なほ一層接近し、空氣通過の際聲帶の全部振動して、樂音を生ずる場合。

以上三種の中、第一は咽喉全く中立の位置にありて、聲音の發生と何等の關係なく(例へばk、t、p等の場合)、第二はh音を發する場合、第三は普通の母音鼻音等の場合をいふ、此三種の操縱は調聲管の操縱と無關係に行はるゝものなるが故に、此上よ

りまた聲音を二種に大別すべし。

(一)有聲音　即ち上記咽喉操縱の第三種と、他の調聲管操縱を結び付きたるものにして、母音、鼻音、流音、濁音等これなり。

(二)無聲音　第一種の咽喉操縱と、他の調聲管操縱との結び付きたるものにして濁らざる凡ての子音これなり。

(六)音學上の分類　音學上の分類又音學上より聲音を分類するに、咽喉より生ずる音は皆樂音に屬し(h音を除く)、調聲管より出づる音は凡て騷音なり、而して咽喉にて造られたる樂音、更らに調聲管にて騷音と化せらるゝことあるが故に、結極左記の三種に分つことを得べし。

(一)樂聲音　Sonore

(二)騷音　Geräuschlaute

(甲)有聲騷音　stimmhafte

(乙)無聲騷音　stimmlose

* * *

聲音は上記の如く諸種の方面より分類するを得べく、觀察點異れば分類も亦隨て同じからず、今これ等を折衷して、個々の聲音の特質を概論すべし。

337637

第七　樂聲音

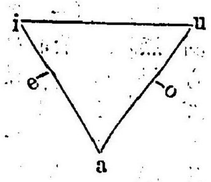
(一)　母音

母音は開放したる口腔中に、舌背を操縦して造る樂聲音にして、理論上其數無限なれども、其中より標準音數種を選拔して、他の代表者たらしむるを常とす、此等の標準母音相互間の關係を說明するに三種の方法あり、

(一)　音色の差によるもの、
(二)　音調の高低によるもの、
(三)　操縱の位置によるもの

これなり。

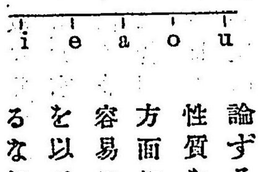
第一音色の差による分列法は最も古くより行はるゝものにして、母音の中最も特殊の音色を有する三音a i uを等邊三角形の三角上に配置し、其他の母音を凡て其中間に並列せしむること左圖に示すが如し。



然れども此說明に據るときは、a i uの三音は互に對等の位置に立てるものゝ如しといへども、實際上は然らず、如何とならばuとiとは正反對の性質を有し、aは恰かも其中間に位すればなり、今試みにu音を發せんとすれば、唇を圓形に造り、舌を後方に退け高めざるべからず、之に反しi音を發せんとならば、唇を

偏平に保ち、舌を前上部に進めざるべからず、而してu音の場合に於ける唇の狹度i音の場合に於ける上顎と舌との間隔、其極度を超えて一歩を進むるときは、u iは忽ち母音の本質を失ひて、子音w yと變ずべし、故に母音の兩極端は實にこのu i兩音に於て示すことを得べきなり。

u i兩音はかく比較的に容易く其位置を指定し得べきに反し、a音は頗る空漠として、殆んど歸着する所を知らず、今u音の位置より舌を低め、唇を稍開ければo音に至り、これより尙舌を低めて殆んどこれを常位置に置き、唇を廣く開けばa音に達すべし、さてこれより漸次舌を前方に高め、唇を狹めて偏平ならしむるときは、e音を經て遂にi音に至るべし、さればu iは母音中の兩極端に位する音なれども、aは其他のe oと同じく中間に位する間音なり、故にこれをu iと對峙せしむるは當を得たるものといふべからず、是に於てaをu iと同一直線の上に置くべしと論ずる學者あり、即ち上圖に示すが如く、aはuとiとの中間音なれば、其性質を指示すること頗る難く、u方面に偏するものは多くu性を有し、i方面に偏するものは又多くi性を有し、何れにも偏せざる純正のa音は容易に定むべからず、要するにu i兩音の中間には無數の聲音連接せるを以て、其中より假りに二三の標準音を選擇して、aとし、eとし又oとすれば、其性質兩極端のu iに比して空漠たるは免れ得ざるところな



り、故に此直線分列法は三角形分列法に比すれば、理論上進歩したるものに相違なきも、元來各音の音色の差を精密に分辨することは、容易なる業にあらざれば、凡て此種の分類法は實際に適せるものといふべからず。

第二音調の高低による分列法は多少この弊害を避けて、幾分か客觀的の方法を取れり、即ち各母音に應ずる調聲管の共鳴室はみな特別の音調を有し、此等の音調は又一定の裝置によりて一々測定し得らるべきが故に、これによりて母音を分類せんとするものなれども、此測定法は熟練を要するものなれば、これも亦實際に遠き分類法たるを免れず。

第三操縦の位置によるものは現今最も進歩せる分類法にして、全く主觀的要素を捨てゝ純然たる客觀的方法を取れり、此分類法の發明者は英國のベル(Melville Bell)にして、氏は子音と同樣に、母音をも其操縦の位置によりて、これを分てり、氏は先づ舌と唇との操縦を區別し、舌に就きては其運動を水平、推直の二種とし、又水平運動を前、中、後、推直運動を高、平、低に細別し、唇に就きてはこれを圓形、遍口形の二種に分てり、氏は又更に以上の各種に就きて、廣音、狹音の區別を立つ、狹音とは操縦せんとする舌の部分特に隆起して凸形を造り、隨て共鳴室の容積を減少するものをいひ廣音とはこれに反する場合をいふ、今此分類法を圖によりて示せば左の如し。

廣音

遍口形 前	遍口形 中	遍口形 後		圓形 前	圓形 中	圓形 後	
1	4	7	高	1	4	7	高
2	5	8	平	2	5	8	平
3	6	9	低	3	6	9	低

狹音

遍口形 前	遍口形 中	遍口形 後		圓形 前	圓形 中	圓形 後	
1	4	7	高	1	4	7	高
2	5	8	平	2	5	8	平
3	6	9	低	3	6	9	低

以上三十六種はベル氏の分類したる標準母音にして、氏は其各個に就きて、現代の歐洲口語中より實例を示せり、顧みて我國の母音を考ふるに五十音圖製作の當時これをア、イ、ウ、エ、オの五箇に定めてより、今日に至りてもなほ依然としてこれを墨守すといへども、口語の發達は此五母音以外に尙幾多の種類を包藏するや必せり、故に吾人は先づ全國中の重なる方言に就きて、現代口語の中に文字によりて區別すべき必要(學術上よりと、實用上よりと)ある母音の數と其性質とを調査すべきこと最も必要なり。

(二) 流音

流音は又顫動音とも稱す、樂聲音の一種にして、聲帶の振動によりて起ること母音と異ならず、但母音の時は口腔廣く開放せられたるを、此場合には舌と上顎と相觸れて、中央若くは側面に一條の通路を殘すのみなり、故に空氣其間隙を通過する際稍激して口腔の一部を顫動せしむ、然れども其通路いまだ全く杜絶せらるゝに至らずして、空氣は絶えず流出するが故に、流音の名あるなり。

流音にはｒｊの二音あれども、後者は我國語になき音なれば、暫くｒ音のみに就きて論すべし、ｒ音は調聲管の中心操縦に屬する樂聲音にして、稀に騷音を混ずるものあり、而して其操縦の位置は、硬口蓋の前部より上齒の背部に亘り、捲舌音、齒音の二種と尚齒音のｒ中に顫動と非顫動との別を生ず、顫動のｒ音とは所謂卷き舌のｒ音なり。

ｒ音の種類はかく數多あれば、同一ｒ文字によりて表はされたるものも、時代と場處とによりて、必しも同じからず、若し我國各地の方言中に存在せるｒ音を調査せば、其種類二三にして止らざるべく、隨て國語のｒ音に古今の差異あるべきこと、亦推し難からざるなり、私見によれば、古代のｒ音は今日のものに比して、其操縦の位置稍後方(もｎ等と同位置)に當り、且多少騷音を混へたるものなるべし、即ち今日の薩摩音はこれに近きものにして、古代の國語にラ行音を以て始る語なきは、全く其

發音の困難に基けるものなり、左の諸例は、ｒの古音ｎに近きことを證す。

思篇(オモヘリ) heni ——— heri
平群(ヘグリ) kuni ——— kuri
駿河(スルガ) sunu ——— suru
古奈(コナ)(子等) ro ——— na
角鹿(ツヌガ)(敦賀) tsunu ——— tsuru

(三) 鼻音

鼻音も亦聲帶の振動より起る樂聲音なること、前記母音流音と同じ、然れども母音流音に於ては、鼻腔の通路常に懸壅垂によりて塞がれ、氣流は常に口腔を經て外氣に通じたるを、この鼻音に於ては其正反對に、口腔の常に其何れかの部分を全く閉鎖し、同時に懸壅垂前方に垂れて鼻腔の通路を開き、氣息はこれより流出す、而して各種の鼻音は口腔閉鎖の場所異なるに從て分る、即ち上下兩唇を閉づれば、唇的鼻音ｍを生じ、舌端を硬口蓋の前部に觸るれば、齒的鼻音ｎ、舌の後部を軟口蓋に接すれば、喉的鼻音ngを生ず、これ鼻音の三大別なり。

ｍｎはマ行ナ行の子音にして、其區別明かなれども、ngは古よりこれをｇと混じて用ひたり。

相樂(サガラ) sags ——— sugu

愛宕（オタギ）——tagi
香山（カグヤマ）——kagu
望多（マグタ）（島來田）——magu

上列の羅馬字は相・宕・香・望の朝鮮字音なり、上世此等のng音を借りて、g音を寫せるを見れば其間明瞭なる區別なかりしが如し。

第八　騷音

語音の中騷音よりなるものは、所謂子音の多數にして、開放せられたる咽喉を通過したる濃厚の氣息、調聲管の某處に於て其通路を狹めらるゝより、摩擦的騷音（所謂摩擦音）を生し、或は其通路一時全く閉塞せられ、氣息の漲るとき俄にこれを開くにより、破裂的騷音（所謂閉塞音又は破裂音）を生ずるをいふ。

（一）摩擦音

唇齒音　下唇と上齒とを接觸して其間に氣息を通ずれば、f音を生ず、此音我國語には無きが如くなれど、ハ行子音をかく發音したる時代ありて、十八世紀の初半までに來朝せる蘭人の著作には、平戸（ヒラド）をFirandoと記すが如く、凡てハ行音を表はすにfを用ひたり、而已のみならず、今日といへども、なほハ行音をf音に近く發音する方言あり、出雲地方の如き其一にして、和訓栞には、出雲人は波行の音甚だ重くふわ、ふゐ、ふう、ふゑ、ふをと開ゆ、半分（ハンブン）をふわんぶんといふ類也と見えたり。

齒音　齒槽突起に舌端を觸れて發すれば、今日のツ音の子音tsを生じ、舌背を觸れて發すれば、ヅ行の子音sを生ず、若し此等の場合に聲帶を振動せしむれば、有聲騷音を生ず、即ち所謂濁音ズ、ヅの子音dz zなり。

顎音　舌背を硬口蓋に觸れて發す、今日のチ音の子音chこれにして、其有聲音は濁音ヂの子音jなり。

喉音　舌の後部を軟口蓋に觸れて發す、獨乙語のachのchこれなり、此音我國語にはなけれども、支那・朝鮮にあり、此種の字音には、國語に於て常に加行音kを宛てたり。

勳（クン）　hun（ヒン）
鶴（カク）　hak
韓（カン）　han
賀（ガ）　ha

（二）破裂音

兩唇音　上下兩唇を閉ぢて氣流を遮り、其漲れるとき俄にこれを開きて發す、p音これなり、若し此時聲帶を振動せしむれば、其有聲音bを生ず、即ちbはpの濁音なり、然るに國語に於て、此b音を標記するに、バ字を以てす、即ちbをハの濁音と見做せるなり、此に於てハ行の古音につきて疑なきを得ず、此事たるや、既に幾度か論辨

せられたる問題なれども、暫く初學者の爲めにこれを反覆すべし、予はハ行の古音をpなりとする論者の一人にして、論據とするところ二三にして止まらずといへども、暫く其數者を擧ぐれば、

(一)今日のハ行子音は、無聲母音にして、唇音と何等の關係なし、隨て其濁音のbとなるべき理由なし。

(二)ハ行の中フは今日も尙唇音なる事。

(三)前節f音の條に述べたる如く、十八世紀の初半迄に、我國に渡來せる蘭人がハ行音をfと聞き取りたる事、並に我方言中に今もなほハ行をfと發音する地方ある事。

(四)我國の音韵學者が古くよりハ行を唇音なりとせる事。

(五)ハ行を表はす爲めに、借り用ひたる漢字の原音、盡くp音なる事、即ち八・非・不・遍・保の如きは勿論、左記の地名の如きも皆p音によりてハ行音を寫せり。

愛甲 kap　甲 kap
邑樂 eup　邑 eup
雜太 chap　雜 chap

(六)日韓同系の語を比較するに我のハ行音は皆彼にてpとなれる事、例へば

日語 ihu　云
日語 ip　口

kahu　買　kap　價
hata　畑　put　畑
ho　穗　pö　麥
hura　晴　park　明

(七)川・顏・岩の如くハ行音より唇音ワ行音に轉するものある事。

(八)五十音圖は印度デヴナガリの順序に依れるものなる事、方今學者の考證によりて、愈明白となれり、今此兩者を對比するに、我ハ行の處は、彼のpに當れる事。

(九)假字本末の附錄に載せたる、對馬人が朝鮮諺文にて記せる我五十音圖を見るに、其ハ行は諺文のp音にて寫されたる事。

(十)連聲の場合に、ハ行音のpとなる事、立派・立法・思計の類。

以上の諸事實を綜合して考ふれば、ハ行の古音pなる事殆と疑なかるべし。

齒音　舌端を齒槽突起の後方に置きて發する破裂音にして、タ行の子音t音これなり、但しタ行の中チとツとは後に變じて摩擦音となれること、前節に說げるが如し、此場合に聲帶を振動せしむれば、濁音dを生ず。

喉音　舌の後部を軟口蓋に接して發する破裂音にして、カ行の子音kこれなり、此場合に聲帶を振動せしめて、濁音gを生ずること、上記の諸音と異らず。

第九　聲音の變化

言語の轉訛、即ち聲音の變遷とは、當時の標準語と遠へる發音法、一己人又は社會の一部に起り、次第に傳播して、遂に全般に普及するものをいひ、其原因は從來これを發音法の簡略、即ち勞力の省減にありと說けども、時としては其反對に出づることもあり、設をマウケ、八日をヤウカといふが如し、されば、大躰に於ては勞力の經濟により、稀には發音を流暢ならしむるため、故らに簡より繁に遷ることありと知るべし。

聲音變化に徐行的と急進的との二種あり、徐行的變化とは妹―イモ（imu―imo）、母屋―モヤ（muya―moya）の如く、兩音の距離近きがため、慣用上無意識に移り行くものにして、其變遷自然的なり、故に此種の變化は常に異同なく、同一狀態の聲音には必らず同樣に出現し、一定の法則を以てこれを律し得べし、これを聲音相通と名づく、急進的變化はこれに反し釣瓶―釣瓶（tsurube―tsubure）、月籠―晦（tsugomori―tsumogori）の如く、咽嗌の間に起る變化にして、人爲的なり、故に此變遷は臨時の現象にして、一般に及ぼし難し、此等を名づけて聲音轉換といふ、然れども此兩種は或場合に於て判別し難きことあり。

故に、普通、聲音變化を說明するには、調聲管の操縱により、其位置、其程度、其順序等を標準と定め、又別に孤獨的と相關的との二に分つ、孤獨的變化とは其一音單獨の變化にして、例へば家―庵（ie―iho）、眉―眉（mayo―mayu）の如し、相關的變化は他の音と權衡上起る變化にして、例へば殘の雪―殘雪（nokori-no-yuki―nokon-no-yuki）、後年―去年（ato-tosi―oto-tosi）の如し。

（一）操縱の位置に基く聲音變化

先づ母音につきていはゞ、孤獨的變化に左記の如きものあり。

蟹を	kani ― kane
兎を	usagi ― osagi
吉野を	yosinu ― esinu

既に前節に述べたるが如く、母音の兩極端はウ、イにして、ア、エ、オは中間音なれば、我國語に於ても、母音の發達はア、ウ、イ先にして、エ、オはこれに次げるものゝ如し。

野を	no ― no
園を	kokuno ― kakonu
忍を	sinobu ― sinobu
樂を	tanusi ― tanosi

此等は皆uよりoに轉じたる例にして、勿論これと反對の場合もあれど、甚だ少數なり、これを漢字の音に徵するに、又同樣の現象あり。

卷目	nuku ― moku
相摸	nu ― mo
咸口	ku ― kou

母音の相關的變化に數種ある中、

出羽を　デハ　i-dé-ha　— de-ha
現を　ツツ、　utsu'-utsu — utsu-tsu
假庵を　カリホ　kari'-iho — kari-ho
峯上を　ヲノヘ　wo-nó-uhe — wo-nó-he

の類は音の長短強弱と關聯するものにして、短く且弱き緩音は常に默する傾あり、

又

峠を　トオゲ　tauge — toge
河内を　コオチ　kauha-uchi — kochi
長息を　ナゲキ　nagga-iki — nageki
來有を　ケリ　ki-ari — keri

の如きは、相隣れる母音互に融化して、新なる一母音となるものにして、これを母音の相互同化といひ、

柳を　ヤナギ　ya-na-ki — ya-na-gi
何處を　イヅク　idsu-ko — idsu-ku
荒男を　アラヲトコ　are-wotoko — ara-wotoko

の如く、前なる緩の母音、後なる緩の母音を同化するを、前進同化といひ、

火穂を　ホノホ　hi-no-ho — ho-no-ho
木葉を　コノハ　ki-no-ha — ko-no-ha
後年を　オトトシ　ato-tosi — oto-tosi
海原を　ウナハラ　u-na-hara — u-na-hara

の如く、後なる緩の母音、前なる緩の母音を同化するを後進同化といふ、其他

嵐を　アラシ　arasi — orosi
撓を　トワワ　tawawa — towowo
慄を　ワナヽク　wonanoku — wanaaku

の如く、同一語にして二樣に母音を整へたるもあり。

子音の變化にも亦孤獨的と相關的との二種あり、孤獨的變化には其種類多しと雖ども、要するに操縱の位置程度の近き兩音相通ずるに外ならず。

附錄

鹽冶　— 鹽　yamu-ya — yen
男信　— 男　nama-sina — nan
美談　— 談　mi-dami — dan
印南　— 南　i-nami — nan

此等の古地名に見えたるm音は、後世に於て盡くn音となれり、n m兩音は等しく鼻音にして、唯其操縱の位置（一は舌、一は唇）異るのみ。

も音は破裂音、n音は鼻音なれども、其操縦の位置同一にして、等しく齒音に屬す、故に兩音相通ずることあり、例へば

己を　オドレ　onore　— odore
隔を　ヘナリ　hedari　— henari
頂を　イタダキ　itadaki　— inadaki
時を　シナ　sida　— sina
縊を　ワナク　wadaku　— wanaku

流音rと鼻音nとも亦操縦の位置同じきが故に、相通ずることあり、左記の古地名に見ゆるは其一例なり。

平群　— he-guri　— gun
播磨　— hari-ma　— han
讃良　— sara-ra　— san
駿河　— suru-ga　— sun
敦賀　— tsuru-ga　— ton

破裂音pと鼻音mとは、何れも唇音なれば亦相通ず、而して我國のハ行音は、既に前節に述べたるが如く、もとは唇音pなれば、マ行音となること多し。

蟬を　セミ　sebi　— semi
乏を　トボシ　tobosi　— tomosi
煙を　ケムリ　keburi　— kemuri
暫をシマシ　sibasi　— simasi
樂をタノシム　tanosibu　— tanosimu

鼻音とng母音uとは其操縦の位置近し、故に相通ず、左記の地名に見ゆるは其一例なり。

久良　— ku-rang-i　— rau
香山　— kang-u-yama　— kau
相摸　— sang-a-mu　— sau

次に、我波行の古音pなること、既に前條述べたる如くなれば、漢字のp音にして今日hとなれるもの、比々皆然り。

法吉　法の韓音　pöp
雜太　雜　〃　chap
邑樂　邑　〃　eup
揖宿　揖　〃　eup

此聲音變化の順序は、唇的破裂音pより兩唇摩擦音（f）の一種にして、今日東北地方及び出雲に於て行はるゝもの）に移り、更に半母音wとなり、最後にh音に至れるな

り、故に左記の諸例は、Sまだ此半母音wの時代にあるものと認むべきなり。

妹(イモヒト) imo-hito —— imo-uto
商人(アキヒト) aki-hito —— akiuto
直衣(ナホシ) nahosi —— nausi
蝙蝠(カハホリ) kaha-hori —— kaumori
首(オヒト) o-hito —— outo
河野(カハノ) kaha-no —— kau-no

又子音の中、特にk m s音は、綴音中に於て默すること多し、これ母音變化の條に述べたると同じく、隣音の長短强弱に關聯せるものと思はる、例へば

輕(カル)を アル(阿留) káru —— aru
島(ハタヱ)を ハタエ hatáke —— hatae
蔵(ナイガシロ)を ナイガシロ nákigasiro —— naigusiro
后(キサイ)を キサイ kisáki —— kisai

以上k音の默する例。

日向を ヒウガ hímuka —— hiuka
候(サウラウ)を サウラウ sámuraú —— samrau
女(ヲウナ)を ヲウナ wómina —— wouna

飲(ノミテ)を ノウデ nómite —— noude

以上mの默する例。

致(イタシテ)を イタイテ itásite —— itaite
益(マシテ)を マイテ másite —— maite

以上s音の默する例。

テ音の相關的變化は一種の同化作用にして、隣音の感化を受くるものをいふ、例へば

祝詞(ノリト)を ノット nori-to —— notto
則(ノットル)を ノットル nori-toru —— nottorn
欲(ホッス)を ホッス hori-su —— hossu
殘雪(ノコリノユキ)を ノコンノユキ nokori-no-yuki —— nokonnoyuki
去(サリヌル)を サンヌル sariuuru —— sannuru

以上の諸例は、流音rが其隣音t s n等に同化せられたるものにして、此等の破裂音(t)、摩擦音(s)、鼻音(n)は、r音と同じく齒音なるが故に、此變化を生ず。

夫(ヲヒト)を ヲット wo-hito —— wotto
新田(ニヒタ)を ニッタ nihi-ta —— nitta

の類も亦唇的破裂音p、隣音hに同化せられ、促音となれるものにして、促音は即ち

破裂音の前提なり。

（二）操縦の順序及び其程度變化に基く聲音變化

操縦の順序とは、主して聲帶の振動に關す、即ち普通母音鼻音濁音の場合には振動し、清音の場合には靜止するを、綴音中に於て此振動時に早く始まり、時に晩く終り、爲めに清濁を變ずることあり、操縦の程度とは音の長短强弱の謂にして、これまた清濁變化の原因となる、例へば

滝を　タギ　aki——tagi
蒲を　ガマ　kaba——gama

の如き、聲帶の振動は何れもkikaのiaより始まるべきに、順序を轉じて、早くk音の時に始まるがため、これを濁音に變ず、又鍛冶の如きはもと金打にして、轉じてカヌチとなり、其ヌは默して聲帶の振動のみ次のチに傳はり、これを濁音に變ず、其他

咽喉　nomi-to——nom-to——nodo
村主　mura-nusi——murau-si——murazi
土師　hani-si——hau-si——hazi
所思　omohoyu——om-hoyu——oboyu
東　hi-mukasi——himkasi——higasi

の如き、皆これと同一の例に屬す。

其他所謂連濁の場合には、必らず濁る音弱し、若し然らずして、二語同一の强度なれば、濁ることなし、例へば

山川　yáma-gaha
山川　yáma káha

又、口腔鼻腔の操縦順序を變じて生ずる聲音變化あれど、今暫く省略す。

以上諸例の外、なほ一種、操縦の順序より起る聲音轉換の例あり、例へば、

茶釜を　チャマガ　cha-gama——cha-maga
釣瓶を　ツブレ　tsuru-be——tsubure
晦を　ツモゴリ　tsumogori——tsugomori
前裁を　センザイ　zen-sai——sen-zai

これ等は、次に來るべき聲音を豫測する餘り、順序を失して、前後顚倒するに至れるなり。

＊　＊　＊　＊　＊

予輩は前後數回に亘りて聲音を論じ、其起原性質より、其分類、其變化に至るまで、略これを述べたり、然れども聲音論は決してこれを以て盡きたるにあらず。既に云へるところは、將に云はんと欲するものゝ半にだに及ばず。されど本講義全體の上より見れば、既に多くの紙面をこれが爲めに割愛したり。予輩は年と共に筆を

改めてこれより語性論に論及せんとす。

語性論

方今世界に行はるゝ國語の數は、若し小區域の方言をも數へなば、殆んと千數百の多きに達すへし、此等をその形態の異同によりて分類せば、幾種類に歸着すべきか、或は又語系の源流に溯りて觀察せば、如何なる結果を見るべか、抑も亦此等の國語は源に於て一に帰すべきか、はた原始よりして多原なるべきか、更に進みて、人類言語の起原は如何、語形意義の變遷する次第は如何、此等は皆吾人が本論に於て說かんと欲する題目にして、何れも學術上至難の問題たり、予は敢て這般の難問を、本篇の如き小冊子の中に論じ盡さんとするにあらずといへども、暫く言語學上の諸說を瞥見して、後聊我國語の語性に及ぼさんとす。

第一　形態上の分類

言語をその形態上、即ち文法上の構造より分類したるは、フリードリヒ、フォン、シュレーゲルを以て嚆矢とす、氏の說は載せて、その『印度人の言語及び知能』の中にあり、即ち、

無機的言語　(一)支那語の如く、全く文法的變化なきもの。
　　(二)接辭を以て文法的關係を表はすもの。

有機的言語　(一)梵語、希臘語、拉丁語の如く、其構造の綜合的なるもの。
　　(二)現在の歐州各國語の如く、其構造の分析的なるもの。

その弟ウヰルヘルム、フォン、シュレーゲル稍これを改めて、左の三種に分ちたり。

(一)語根常に獨立して、毫も文法上の變化を受けざるもの。
(二)語根その獨立を失ひ、他語に接して、文法上の變化を代表するもの、即ち所謂接辭によりて文法的變化を表はすもの。
(三)語根内部の變化、即ち所謂インフレクション(曲折)をなすもの。

この說はアウグスト、シュライハー、マクスミュラー等によりて多少俯補せられ、シュライハーの命名したる(一)インソリーレンド(孤立語)、(二)ツーザンメンフューグンド(粘着語)、(三)フレクチーレンド(曲折語)の名によりて、今日に至るまで、普く學者間に流布せり。

(一)孤立語　に於ては、言語中の實質(例へば名詞の如きもの)と形式(例へば亘爾波の如きもの)との間に、根本的の區別なく、兩者對等の地位に立ちて、何れも獨立の語根によりて表はさる、即ち語根は常にその獨立を保ちたるまゝ、文中に羅列せられたるなり、此種類の好標本は支那語にして、所謂印度支那語即ち安南、暹羅、緬甸等の諸語も亦これに屬す。

(二)粘着語　に於ては、獨立を失ひたる語根(即ち前記の接辭)を、語根の前後又は內部に附着して、文法上の形式を表はす、かのウラルアルタイ語族(即ち土耳其、韃靼語サ

モヱード語・蒙古語・滿州語・朝鮮語等)及び印度南部のドラヴヂア語・馬來語・ポリネシア語・亞米利加土人語等これに屬す。

(三)曲折語　に於ては、言語中の實質形式の兩分子互に融化して一體となり、或は又語根内部の變化によりて、文法上の形式を示めす、例へば印度歐羅巴語の如きものこれなり。

今孤立の本義を表はす語根をRとし、唯形式のみを示めすものをrと定むれば、孤立語には次の如き諸種類あるべし。

r+R　R+r　r+R+r'　r+r'+…R　R+r+r'+…　又語頭に來る接辭をpとし、語尾に來るをsとし、語の内部に來るものをiとすれば、粘着語には左の諸類あるべし。

$R\ {}_pR\ R_s\ R_i\ {}_pR_i\ {}_pR_s\ {}_pR_s\ {}_pR_i\ R_{rs}$……然れども、此等の諸式は何れの粘着語にも甚く存在せるにあらず、國語の異るに連れて、各特殊の趨勢あり、例へば日本語・ドラヴヂア語には接尾辭多く、亞非利加内部のバンツー語には接頭辭多く、馬來語は接内辭に富めり

曲折語は語根内部の變化を主とし、加ふるに接辭の結合によりて、文法上の形式を示めすものなれば、左の諸種類あるべし。$R^r\ R^rs\ {}_pR^rs\ {}_pR^r\ R^{rr}s$

上記三大別の外、言語學者の一派は、バスク語の如く人代名詞の目的格、動詞と融化して一體となるもの、又は全文章の合體して、恰かも一動詞の如くなるものを、更に

一種類と定め、又母音の同化作用(語中の一母音勢力を占めて、他の母音をことごとく同化すること、たとへば後人(アトビト)ato-hito の弟(オトホト)otohoto となるが如きもの)によりて、更にまた別種類を分たんとすれど、種々の異論ありて、學界の定說は前記の三分說にあるが如し。形態上の分類は概略此の如しと雖ども、此等は其根本より性質の異なるものか、抑も亦進化の諸階段なるか、ボッドは此等の諸種が其根底より類を同じくせざることを唱へ、セイスの如きは、國民の腦髓異るに連れて、言語の性質に差異ありと論ずれども、事實上絕對的の孤立語なく、粘着語・曲折語も亦これを見るべからずして、何れも多少他の分子を混じたり、されば孤立・粘着・曲折何れも生得の性質にあらず、實に言語進化史上の諸階級として、孤立に起り粘着の時代を經て曲折に至りたるものなるべく、更に得來を慮るに、再び順環して、進歩したる孤立の時代を見るに至るべし、即ち此等の三種別は、個々分離したるものにあらずして、互に離すべからざる關係を有する連鎖なり。

例へば、孤立語の標本なりと目せらるゝ支那語に於ても、我的父親(私の父)の的は既に獨立の意義を失ひ、唯名詞の持格を表はす爲の符合に用ひられたること全く粘着語と異らず、其關係恰かも我國語に於て牡牛(オウシメウシ)・牝牛のヲ、メは、尙獨立に雌雄の意義あれども、甥(男人)(オトコビト)・姪(女人)(メビト)のヲ、メは、既に獨立を失ひて、其原義を知覺せられざると相似たり、支那語の外、西藏語・緬甸も亦同じく粘着語の性質を混有し、現今純粹に孤立

語なるは安南語・遮羅語のみなり、就中緬甸語の如きは、語根の內部を變じて動詞の自他を別つなど、多少曲折語の性質をさへ帶ぶといふ。

又或學者が分類の標準と定めたる、母音同化作用の如きも、決してウラルアルタイ語族のみの特有する現象にあらず、發音の輕便を尙ぶ全般の趨勢より起る當然の結果にして、何れの國語にもこれと同樣の實例乏しからず、例へば後と「ッと」日の複合して名詞となる場合に、若し元のまゝに ato-tsu-hi と發音せば、a o u i 四母音のために一々發聲機關の操縱を改めざるべからず、其不便を避けんがため a u を o に倣はしめ、かくて oto-to-hi（一昨日）の語をなせるなり、されど、これ等は既に述べたるが如く、ウラルアルタイ語族のみに限られたる現象にあらずして、ケルト語ドラヴィア語等にも存在し、獨乙語のウムラウトも亦其一種類たるに、外ならず、例へば pfel の複數 aepfel と變ずるが如き、これを古獨乙語に徵するにもと單數は apful にして、複數は語尾に i を付して apful-i といひたるを、かくては母音の調和を失ふがため、時と共に次第に變じて edfil-i となり、遂に今日の形に至れるなれば、これ實に母音同化の一種なり、されば母音同化作用も亦以て言語分類の標準とするに足らざるを知るべし。

又所謂曲折の中にも其起原粘着に出でたるもの多く例へば英語動詞 to be（有）の一人稱 am の m は人代名詞一人稱の語根にして、二人稱 art の t は二人稱人代名詞の語根なるが如き、又獨逸語動詞 sagen（云ふ）の過去 sag-te の te は、もと獨立の動詞 thun（爲）なるが如き、いづれも然り、其他我國語に於て山々、品々、津々、浦々の如く名詞を重ねてその複數を示し、或は黑々、長々、久々、有々、「聲伊繼伊繼」、「余曾比余曾比」、「煙立龍」の如く動詞形容詞を重複してその意義を深むると同じく、印歐語に於て語根の重複によりて過去を示めすことあり、例へば梵語 vid（知る）の過去を一人稱にて vi-vaidma といふは vid-vid-ma の約にして、即ち同一動詞を重ねてこれに一人稱の代名詞根を添へたるなり、英語動詞 do（爲）の過去を did といふも亦これと同一現象にして、此 did 再び他の動詞根に結合して其過去を表はすこと love（愛す）loy-ed の如し而して此の如く獨立の數語結合する場合に於て諸種の聲音變化を起し、爲めに原形を失はしむること多し、例へば上記の vid-vid の vi-vaid となり、又 tud（投ず）の過去 tud-tud の tu-taud となるが如きこれなり、此等の變化は多く「アクセント」の影響にして、獨逸語にて「アップラォト（Ablaut）」といふものに相當す、此外なほ諸種の原因よりこれと類似の變化を起すことありて、例へば英語 lead（導く）の過去 led は led-de（この -ed は即ち前記の如く did の變形なり）にして、lead の led と變ずる所以は、日耳曼語系に於て二重子音の前に長母音の來るを避くるがためなり、feel（感ず）の過去 felt とな

り、leave (離る)の過去 left となるが如き、皆同種の變化にしてこれを僞「アップラオト」と稱す、尙ほ別種の例を擧ぐれば、英語 mun(人)の複數 men はもと mann-is にして、語尾 -is の母音 i 語根 mann の母音 a を同化してかくなれるなり、又英語動詞 tell(告ぐ)とその過去 told との關係もこれと同樣の聲音變化による、即ち tell の古形は tal-ian にして、その過去形 tal-de より told を生じ、tal-ian は語尾 -ian の i tal の a を同化して(tell-an となり、それより今日の tell となれるなり、かくの如く語尾母音の影響を受けて語根母音の變化することを稱して「ウムラオト」(Umlaut)といふ。

以上述べ來りたる如く、所謂曲折と稱するものも其根元に溯れば何れも獨立の諸語を粘着したるものにして、たゞ「ウムラオト」「アップラオト」等の聲音變化のため相融化して原形を損じたるものなれば、其實質に於て粘着と何等の擇ぶ所なし、即ち曲折は言語の本質、機能より特發せる現象にあらずして、粘着の時代を經て稍別方面に進みたりと云ふに過ぎざるものなれば曲折と粘着とは根本的の差異にあらず、而已ならず粘着語中にも往々曲折を見ることあり、例へば我國語の數詞を見るに一(hito)の二(huta)となり、三(mi)の六(mu)となり、四(yo)の八(ya)となるが如く、いづれも內部の母音變化によりて倍數を示せるがごとき、兄(ani)と姉(ane)と母音の變化によりて男、女性を分つが如き、或はかの同化作用にて後年(atotosi)の一昨年(o-to-tosi)となれるが如き、又滿州語 ama (父) eme (母) の母音によりて兩性を分つが如

き、いづれもこれを英語 man (男) wo-man (wife-man の義、女)、man-servant (下男) maid-servant (下婢)の如く別語を添へて兩性を分つもの及び英語數詞 twelve (十二) twá 二 lif 殘の義) 佛語數詞 onze (十一) 拉丁語 un-decim の約) 等に比して、寧ろ遙に曲折の性質を備へたるにあらずや、故に此等の粘着語は程度の差こそあれ、曲折の性質を帶ぶること梵語、希臘、拉丁語等と毫も異る所なく、結極曲折語と粘着語との中間に判然たる境界線の劃し難きを知るべし。

故に言語形態上の三區別孤立、粘着、曲折は各根本的の差異にあらずして、連續した る言語發達史上の階級たるに過ぎず、一語族又は一國語中に同時に此三者を兼有することとあり得べく、即ち今日の孤立語は粘着に向ふ傾あり、粘着語は又曲折に進み、曲折語は再び孤立に復歸せんとし、轉々廻り去つて絕えざるものゝ如し、これを歐羅巴の近世語に徵するに、拉丁語にて amavi (動詞愛すの過去) 一語の曲折中に含蓄せし意義を、今日の佛蘭西語にては J'ai aimé の三語を以て時と人稱とを別個に表はすに至り、英語に於ても名詞の格、動詞の人稱等、多くは磨滅し去つて其趾を止めず、かく言語は其發達の徑路に於て常に轉變し必しも一者に執着せず、かの「ハミチック」族の如き、はそのナイル河畔に於ける五千年の發育史上中に、遍く上記三種の形態を經過したり。

これによりて考ふるに、言語の形態上の區別は毫も人種と年代とに關することな

きを知るべく、曲折を印歐語族の專有と考ふるが如きも一の妄想に過ぎざるなり、要するに形態上の三區別は便宜上の分類にして、理論よりすれば何等の根據あることなく、恰も雪と氷と水と其形異なれども實質に於て寸毫の差別なきと相似たり。

第二　系統上の分類

言語は其形態即ち文法上の構造に於て種類多きがごとく、又其材質即ち依て某の形態を構成するに用ふる材料に於ても一樣ならず、今世界上に存在する各國語に就きて調査せば、同一の意義を別種の聲音によりて、表はし、且其聲音に於て各國語其特徴を有し區々一定せざる樣眞に絶世の奇觀たるべし、かく千差万別の中に亦自から相似たると異れるとありて、其似たるものを類によりて蒐集せば各一團の群をなすべく、此方面より亦言語を分類し得べし、例へば歐洲各國語中にても以太利、西班牙、佛蘭西、葡萄牙、英吉利、獨逸和蘭、瑞典は各一群をなして著しく相類したること、少しく洋語に通ずるものゝ容易に知り得る所なり、而已ならず外見上無關係の如く見ゆる語も研究の末意外の連絡を發見すること多く、此等の調査を經て共通の語根を有する國語を集め、所謂語族といふものを組織すべし、然れどもこれ決して外觀のみの類似をいふにあらず、聲音は大に相似て意義の全く異るもあり、又聲音意義は全く同じくとも外來の借用語にして其國固有の語ならざるもあり、故によく此等を識別し、聲音律の原則に照して異同を分ち、而して後眞に所謂語族なるものを定め得べきなり、例へば

	父	兄弟	星
英語	father	brother	star
獨語	vater	bruder	stern
佛語	père	frère	étoile
伊語	padre	frat-ello	stella

の如きは其一語根より出でたるものなること相對照して容易く、知るべく、東洋語に於ては此種の研究いまだ充分ならざるがため印歐語の如き確實なる例證を示し難きも、今暫く日韓語のみに就きて類似の語二三を擧ぐれば、

	日	韓
母	omo	ŏmi
牛	usi	so
鳥	tori	tark
雲	Kumo	kurŭm
海	Wada	pata

若し此の如き實例數多あらば、茲に始めて兩國語の語系に關する問題起るべし、然

れども言語の系統は獨り語彙の類似のみならず、同時に其文法上の構造をも參照せざるべからざること勿論なり。

言語をその系統上より分つとき、普通に人種上の分類を基礎とす、即ち概略左記の如し。

第一亞非利加黄色人種語

1 ホッテントート語　ナマ、コラ、カップ等數種の方言に分る、人口の總數約十萬、粘着語の一種にして母音の種類に富み、且此語族に特種のシュナルッ音とて、吸氣にて生ずる音を有す。

2 ブッシュマン語、亦粘着語にして、ホッテントート語と同じく、シュナルッ音を有す。

第二バンツー人種の語、亞弗利加黑人種にして、エクェトール以南に廣く分布し、その總數七千万を超ゆ、カフィール、ザンジバール、テケザ、コンゴー等の方言ありて何れも粘着語に屬す。

第三純粹の黑人種語

1 マンデ語、セネガムビア及び北方ギニアに住する人種の語にして、孤立語に屬す。

2 ウォロフ語、セネガムビアに行はるゝ一種の語。

3 亞非利加西岸に行はるゝ語にフェルップ、エウェイボ等あり。

4 スーダン語、ソンレー、ボルヌ等數種ありて、各自その形態を同じくせず。

5 ナイル語、バリ、チンカ等の數種あり、何れも粘着語に屬す。

第四バブア種族の語

1 マフォル語、ニューギニアに行はる。

2 ネグリトス語、フィリッピン及びスマトラに行はる。

3 ミンコピース語、アンダマン土民の語。

第五オースツラリア種族の語、孤立、粘着、曲折の諸種を混有すれども、亦一語をなす。

第六マレオポリネシア語族、オセアニア全洲、マラッカ半島、臺灣、マダガスカー、及び印度洋中の諸島嶼に廣く分布す。

1 メラネシア語、フィヂー島、及び濠洲、大陸東北岸の東方に分布せる諸島嶼に行はる。

2 ポリネシア語、サモア、トンガ、マオリ、布哇等の諸語あり。

3 馬來語

(a) タガラ語、フィリッピン、マダガスカー、臺灣等に行はる。

(b) マレオ、ヂャヴァ語、馬來語、カヴィ語、バッタック語、ダヤック語等を總稱す。

マレオポリネシア語族は孤立、粘着の兩種あれども、其根源は一に歸すべし、而し

て聲音組織の簡單なること世界言語中無比にして、子音の數多きも十、少きは七を超えず、古くより文學を有し、特に爪哇島附近の島嶼に行はるゝカヴイ語の如きは、第一世紀の頃より印度文化の影響を受け、印度式の文字を造り、梵語系の文字をも發達せしめたり、其他マレー語に於ては亞剌比亞文字を採用し、十四世紀の頃より文學を有せり。

第七ドラヴィヂア種族の語

1 ムンダ語、下ベンガル地方の語にして、粘着語なり。

2 シンハリ語、錫蘭島の語にして、梵語、パリー語等の多く混入せるがため、時として印度歐羅巴語と誤解せらるれども、其實は全く別種にして、佛教文學に富めり。

3 ドラヴィヂア語、アリアン人種に先ち全印度を領せしも次第に驅逐せられて今は印度の南端にのみ住する人種の語なり、其中タムル、テリンガ、マラヤラムカルメタ、ツル等の細別あり、其人口の總數は五千万にして、アリアン系統の文字を有し、また多く梵文字の飜譯あり、粘着語の一種にして、頗る聲音の種類に富み、破裂音のみにても六種ありといふ。

第八アメリカ人種の語

1 アトハバスク語、加奈陀の西域、及びカリフォルニアの一部に行はる。

2 アルゴンキン語、

3 ダコタ語、合衆國の西部に行はる。

4 オレゴン語、

5 プエブロ印度人語、コロラド、テキサス地方に行はる。

6 メキシコ土人語、

7 マヤ語、中央亞米利加の語。

8 ガリビ族の語、グヤナ地方の語。

9 アラウカン語、南米智利國の語。

10 チクィト語、ボリヴィアの方言。

11 ヅピグァラニ語、ブラジリア土民の語。

此他尙數種ありて、其形態上の種類も一定せず、或は全く孤立的なるもあり、又粘着的に近きもあり。

第九アークチック種族の語、北方亞細亞、及び亞米利加の北部、西北部に住する民族間に行はるゝ語の總稱にして、次の六種に分る。

1 ユカギール語、西比利亞の東北部に行はるゝ語にして、其人種の總數僅に千を超えずといふ。

2 コルヤーク語、亞細亞大陸の東北端に行はる。

3 アイヌ語、千島群島、カムチヤッカの南端、及び北海道の一部に住する種族の語、
4 エニセイ、オストヤーク語、
5 エスキモー語、
6 アロイト語、

第十　蒙古人種の語

1 東南亞細亞の語、單綴語と稱するものにして、一語一綴よりなれる孤立語なり。

(a) 支那語、世界中最廣區域に用ひらるゝ言語にして、人口の總數四億、其中マンダリン方言即ち所謂官話最も廣く行はれ、殆んど全國の五分の四に通用すれども、此外廣東、厦門、寧波、等の方言多く、最古の文學は耶蘇紀元前三世紀に始まる、古代の支那語は形態上孤立語に屬せりといへども、近世に至りては漸く粘着語の性質を帶ぶ、その文字は古代より今日に至るまで象形體にして、稍これを寫音的に轉用することあるのみ。

(b) 安南語、モン、カムボヂア等の諸語あり。

(c) 暹羅語、タイ、ラオス、シャン等の諸語あり。

(d) 緬甸語、ロヒタ語あり。

(e) ヒマラヤ語、西藏語、レプカ語等あり。

此等語族中孤立語の性質は支那語最多くこれを保存し、西藏語最多くこれを失へり、然れども、何れも單綴語なるが故に同音異義の語に富み、語調の區別によりて意義の混亂を防げり、其種類官話に於ては四、福建語には八、安南語には六、暹羅語には五、緬甸語には三あり。

2 日本語、

3 朝鮮語、

此兩語は何れも粘着語にして、其系統頗る相近し、(此問題は更に別章に於て詳論すべし)日本文學は第七世紀の頃よりこれを見るべしといへども、朝鮮語は文字の發達幼稚なりしがため、古代文學に見るべきもの頗る少し。

4 ウラルアルタイ語、其使用せらるゝ地域頗廣く、東はオホツク海より西はアドリアチック海に至り、北は北東岬より南は黃河に至る各地方に散在す、其主要なるもの五種あり、其中滿洲語、蒙古語、土耳其語を合せてアルタイ語と稱す。

(a) 滿洲語、滿洲に於ける滿洲語及び東部西比利亞のツングース語をいふ。

(b) 蒙古語、東蒙古語、西蒙古語及びバイカル湖邊のブルエート語を總稱す。

(c) 土耳其語。ウイグール語、オスマン語及び西比利亞の東北方に行はるゝヤクート語等をいふ。

(d) サモエード語、北氷洋沿岸に住するサモエード種族の語。

(e) ウラル語、フイン語、(スオミ語、セレミス語等に分る)ラップ語、ウグル語(マギヤ

ール語、ウオグル語、ペルミール語等に分る）。

(f)最古のアッシリアバビロニア語なるスメリア、アッカヂア語をもウラル、アルタイ語族に加へんとする學者あり。

ウラル、アルタイ語族は其形態一ならず、滿洲語の如き粘着語あり、フイン語の如き曲折語あり。

アルタイ語族中文學の發達したるは滿洲語、蒙古語、ウイグール語、オスマン語にして、就中ヴィグール語の文學は最も古く、其文字はシリアに學び滿洲蒙古も亦これに倣へり、滿洲文學は多く支那文學の翻譯にして、蒙古文學はまた佛教の梵文學の翻譯なり。ウラル語族中最古き文學を有するはマギャール語にして、第十二世紀の頃よりこれを見るべし。

第十一　ヌバ人種の語、

ヌバ人種は黑人種とカウカシア種族との中間に位し、寧ろ後者に近きものにして、黑人種に接近したる地方に住す、フルベ、ヌバ、ドンゴラ、テケレ、バレア等數多の方言に分る。

第十二　カウカシア人種の語、

1バスク語、佛蘭西、西班牙の境なるピレニース山中の一部落に行はるゝ語にして、所謂インコルポリーレンド（合體語）に屬す、即ち目的格なる人代名詞其所屬の

801.
Ka373g

言語学

国立国会図書館

076608-000-6

801-Ka373g

言語学

金沢　庄三郎／著

M36-37

DAA-0017